

末黒野

すぐろの

9月号
(通巻925号)



名残の日

森 清 堯

石楠花や岩に走り根めぐらせて
東雲の湖畔の茅花流しかな
だんまりの後のはつらつ古茶新茶
丸屋根の東屋に座し紅薔薇
葉籠もりの鳥語しきりや走り梅雨
竹林の風の旋律六月来
軍港の紫陽花の色濃く重く
名残の日弾き泰山木の花
六度なるワクチン接種青葉冷
教会へ坂下る妻白日傘
山法師坂の先なる漁師町
巢より嘴出す子燕や長屋門

岩清水

岡野里子

築山を彩り黄楊と石楠花と
茅花流し水無き川のさざれ石
崖伝ふ伏流水や羊齒若葉
酒蔵の洞の紙垂揺れ岩清水
草叢の種火めきたり蛇苺
曇天の庭へ点火やアマリリス
立葵本丸跡の堀の縁
白木の橋渡る櫓や青時雨
三角の矢狭間を抜けて夏の蝶
日照雨していよいよ白き山法師
睡蓮の目覚め初めたり日照り雨
万緑の中より降り来鳥の声

瑞声

夏蛙

黒滝志麻子
(顧問)

入れ替はる学生寮や夏燕
対岸の日傘応ふる日傘かな
自転車の灯のふらふらと夏蛙
店先の刃物の光る薄暑かな
生まれては風にさらはれ糸蜻蛉
大輪の薔薇や込み合ふ路地に咲く
すいすいと一輪車の子梅雨晴間
夕涼し味の穴場は路地の奥

甲矢集

田の神

太田良一

腰かがめ駆け込む酒楼走り梅雨
国引きの出雲育ちや荒神興
黙食の身につく習ひビール飲む
水を撒く単身赴任の神父かな
健啖の隣の老女どぜう鍋
海越えて焦ぐる匂ひや南風
明早し鎌倉駅の車夫の列
田の神の急かす日暮の田植かな
小さくとも雲を逃さぬ植田かな
父の日の酒一合の閑居かな

銘菓

小田嶋野笛

たんぼぼの絮へ肺活量試す
母の日や譲れぬ自由てふ孤独
裏町や白薔薇の名は大女優
筍を掘るや漢の貌となり
はらわたの涼しや鮎といふ銘菓
すたすたと二才の散歩揚羽蝶
師の墓や日の燦燦と枇杷熟る
渦巻のストローへ来る夏の蝶
遠視いま乱視となりぬ梅雨の月
雨音のいよよ激しやうけら焼き

島泊り

森清信子

白帆ゆく海の広さよ夏帽子
明易や蘇鉄ざわめく浜通り
島泊りつかめさうなる夏の星
薫風をたつぷりと入れ児童館
単線路空へと伸びて麦の秋
七変化影は等しく翳りけり
慎ましき暮し変はらず豆御飯
鎖骨透く異国の少女夏の浜
夕焼にひととき覚めて峡の村
魚河岸の静まり返り夕薄暑

田植機

石黒興平

清明や農一筋の兄逝きて
筍のすでに持ちをり節の数
溜息も感嘆のうち薔薇開く
麦秋やかつて将門馳せし里
朴の花湖を眼下のひとつこ
瀬頭の明るきところ囀鮎
田植機や人手に頼る田の四隅
緑蔭や居眠り誘ふ午後の椅子
走り梅雨止んで雨降山の碧
鈍色の空おりてくる梅雨入かな

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



夏日影

池谷鹿次

越えて来し峠いくつや夕焼くる
百日草色とりどりの園の庭
白百合やそよ吹く風の昼深き
砂を這ふ南瓜の蔓の花二つ
万緑や分水嶺の村境
砂浜の貝殻光る夏日影
紫陽花の娘ざかりのごとくなり

朝の勤行

長尾タイ

梅雨入

今村千年

五歩十歩退きて仰ぐや那智の滝
高野山の灯す参道夏木立
老僧の朝の勤行薄衣
結願や素足の軋む長き廊
名刹の仁王の眼緑差す
仁王門くぐる奥社や著莪の花
倒木のふさぐ杣道苔の花

麦刈るや里の子供の遊び場に
竹散るや谷戸の細道日の差して
禅寺の鐘の音色も梅雨入かな
梅雨入りて三重の塔遠ざかる
句碑尋ね梅雨の野毛坂たもとほる
梅雨夕焼街を焼かれしときのごと
憂きときも楽しきときも籐寝椅子

濡れ色

池乗恵美子

合歓の花

岡田史女

払暁や泰山木の花掲げ
母の日や母となりたる吾子の背
いかづちの一句落せる乙夜かな
濡れ色の花の饒舌六月来
老鶯の間合よろしき朝かな
明月院ブルーの点り梅雨に入る
病める眼へ青葉若葉の光かな

ゴンドラに身を任せたり青時雨
帆船も小船もけぶる梅雨入かな
紫陽花や車窓に日々の過ぎてゆく
玫 瑰や潮の香残る公園に
底抜けの雨となりけり合歓の花
空は空色水は水色合歓の花
大寺の坂の長さや滑草

夏の宵

大川暉美

翠巒

高木邦雄

根上りの花桐空を引きよせて
木洩れ日を少し揺らして黒揚羽
伸ばす歩や泰山木の花の風
掘り探る手に大き物新馬鈴薯よ
新茶汲み旅の思ひ出語りをり
夕さればいよいよ白し手鞠花
エチュードの流るる路地や夏の宵

千枚田千の水面に首夏の月
沖を行く巨船卯波を押し分けて
梅雨晴間銀輪連ね江ノ島へ
汀女句碑囲むあぢさゐ彩清か
鬼百合やいつも詫ぶやう下向きて
畳なはる翠巒映ゆる棚田かな
夕さりの土手灯めく忘草

青炎集

森清 堯選

横浜 上月智子

走り梅雨水田の面を濁らせて
廟より声のみ聞こゆる燕の子
太き実の残る上枝や豊後梅
夏鶯補聴器並ぶ母の卓

蝙蝠や広場に女子のダンスの輪
遠近の二機の田植機千切れ雲

横浜 杉山弥生

藤沢 宮澤靖子

ゴンドラの運河越えゆく薄暑かな
道化師の客と一体若葉風

惚けたるもカラオケ上手夏燕

クラス会へ介護を抜け来夏の蝶

挨拶の小学生やさくらんぼ

豪雨去る駅の広場や五月闇

花は葉に八十歳の同期会

夏の海紺深ければ途中下車

数ふるたび目高の数の定まらず

八歳と八十路覗くや白目高

ぬかるみに滑り跡かな登山道

夕立や連なる僧の藁草履

大網白里 亀卦川菊枝

町田 中野千代子

あつけなく逝き給ふ君首夏の真夜

君のぬぬ雨の六月はじまりぬ

罅割れの遺愛の眼鏡梅雨曇

貴方ですか朝な夕な不如帰

水鶏鳴く上総の郷に一人ぼつち

蜘蛛の囿や八十路に入りて戸主となり

手漉き和紙の葉書の熱や夏始
新緑へ五体を沈め紅茶飲む
強がりの癖は直らず梅雨菌
水に溶く別れの言葉水芭蕉
ハンカチを鏡に張るや旅の夜
シャーベット運ぶロボット軽やかに

相模原 板谷俊武

川崎 滋野 暁

一煎は水出しとする新茶かな

翻る胸の白さや夏燕

木耳や骨伝導の味はひも

振花や伏せぬる犬の鼻の先

十葉やクルスに祈る修道女

人一人庇へざる傘大夕立

独活和や吾が生辰の馳走とし

白き薔薇ことに好みは一重咲き

良寛の句彫る墓裏新樹蔭

横たはる仏陀泰山木の花

裏の草刈る表まで香の満ちて

青葉若葉力作揃ふ絵手紙展

横浜 岡美智子

横浜 前原マチ

毒だみや手を付けられぬ庭手入れ

せせらぎの鯉跳ね合うて梅雨に入る

紫陽花や傘一列の通学路

昨夜の雨今朝の紫陽花濃かりけり

梔子の花に蠢く小虫かな

戸袋に住みし守宮の馴れ馴れし

移転先の医院探しや街薄暑

無口なる庭師新茶に和みけり

白百合や会ひ六日後の遺影とは

梅の実を落とす作務僧女坂

思案めく青鷺写し心字池

花合歡や投ぐる玩具へ犬走り

横浜 加藤直人

横浜 山崎稔子

花びらの散りて人寄せ箱根薔薇

桜桃や制服のまま荷ごしらへ

筒鳥や真似て叩ける竹林

風青し乳首のとがる少女像

縄張りの窠跡巡り閑古鳥

アイドルの難読の名や田水沸く

翡翠の嘴にあばれて白き魚

雲白く青蘆原のざわざわと

走り梅雨富士山頂は雲の中

木洩れ日や桂若葉の杣の道

駅舎出づ茅花流しを背に受けて

谷底まで段段のビル大西日

耕 土 集 岡野 里子 選



抜襟のマドモアゼルや夏始
陶器舗の閉店セール梅雨晴間
雨空や拝む地藏の苔青く
大雨の爪痕辿り菖蒲園
夏祭火落とし近き製鉄所

川崎 木村 純子

花菖蒲若き作務衣のオートバイ
山峡を登り香るや花炭
染浴衣砂蒸し風呂に包まれて
真つ赤なる薩摩の梯梧並木かな
牧草のロール遠近夏野原

狭山 山中 ミツ

東北の水のあまねし早苗月
湯上りの石鱗の匂ひ藍浴衣
籐椅子や東南に置くインテリア
七変化財布の中の競馬券
佐渡行の船やごめへと餌をなげて

横浜 三浦千恵子

風うけて白波のごと茅花の穂
阿蘇谷の放牧の牛夏蕨
子連れ鴨道横切りて川面へと
朝空や巢より飛びたつ夏燕
梅雨晴の老いの手に鋏土弄り

狭山 岩根ツユ子

草取りやヒップホップの聞こえる
濃紫陽花玻璃の器に浮ばせて
花栗のむんむん匂ひ里歩き
田水張る面のアルプス少し揺れ
恐恐と覗く峡谷雨燕

狭山 小山すみ子

花摘みの紅の櫛や菖蒲園
赤潮に発泡スチロールぶかり
湯上がりや夕餉待つ間の遠河鹿
どこからか栗の花の香風の道
庭仕事のちよつと休憩時計草

横浜 森川 享

たたなはる青羊歯溪を明るうす
祖母ありし頃の夕ぐれ釣糸
隠沼に水音たつる翡翠かな
百万両のふくらむポツケ小判草
体験田横一列の田草取

横浜 近藤 知子

ぢりぢりと百合の芽大地持ち上げて
会堂のリボンの少女復活祭
竹林に沿ふせせらぎや夏来る
若葉風仄かに甘く桂の木
祝典の楽曲聞こゆるアマリス

横浜 北野 節子

塾よりの子待つ厨梅雨の月
蛇苺灯のもるるトタン屋根
水撒きや朝ひとときの庭弄り
図書館の窓辺に近し桜の実
買ひ換への老眼鏡や半夏生

狭山 小林 友子

薫風や妻付き添ひの散歩道
鉄線の初花開き地藏堂
細りゆく両足かかへ梅雨に入る
新しき墓の朱文字や緑さす
南風吹く海のうねりや屏風岩

横浜 小林 拓路

山笑ふ阿夫利神社男坂
沢風に波打つ藤の若葉かな
山里のさくらんぼ狩り子等夢中
夏星や潮騒届く露天の湯
九十九折越えて段々青田風

横浜 西 計郎

新緑の香に包まるる旅の宿
土寄すや馬鈴薯の花真白なる
梅雨晴間逆さ穂高の池に映ゆ
梅花藻や湧水光りつつ流れ
麓から湧き上がる雲梅雨晴間

狭山 谷安喜美子

木々の音青葉の風の浜伝ひ
ギヤマンの透くる絵柄や吟醸酒
細波に群るる小魚夏の川
ビー玉の内なる光梅雨晴間
苔石に残る雨あと夏椿

三浦 田中由紀子

買ひ物の足止めさるる白雨かな
赤紫蘇のジュース携さへ散歩道
今日もまた雨やなほ濃き青葉間
青梅雨や午後は晴れ間の出る予報
毬なして道を狭めし濃紫陽花

横浜 玉川 利江